

# てこな・ミュージック・ジャーナル

## 編曲する 音楽家たち

### 効果的な編曲

編曲という言葉はポピュラーでもクラシックの世界でもよく耳にする言葉です。単旋律、あるいは簡素な旋律が、編曲によって効果的な音楽的広がりを得て人気を得るということがよくあります。例えばポピュラーでは松任谷由美さんの曲などまさにそうだとってもいいかもしれません。クラシックにおいてよく知られた例ということ、ムソルグスキーのピアノ組曲「展覧会の絵」と、それをもとにしたラヴェルの管弦楽編曲版「展覧会の絵」でしょうか。

さらに楽器を変える編曲では、モンティのチャルダッシュのように、オリジナルは何だったか忘れさせるほど、さまざまな楽器で演奏されているものがあります。

### 自作の編曲

ヨハン・セバスチャン・バッハはヴィヴァルディの曲を原曲にコンチェルトを書いています。このように、他人の作品をもとに編曲する場合と、ベートーヴェンのようにヴァイオリン協奏曲をピアノ協奏曲に、交響曲をピアノ三重奏曲に自作を編曲している作曲家も少なくありません。グリーグも管弦楽組曲「ペールギュント」をピアノ版「ペールギュント」にしています。

### 編曲の天才リスト

他人の作品で大活躍したのは19世紀のリストです。ベートーヴェンの全ての交響曲やシューベルトの歌曲の編曲などを盛んにしました。過度な即興を加えるなどして、聴衆が驚き感動する様子を舞台上から眺めて楽しむかのように、さまざまに技巧を駆使しました。そのような才能を存分に発揮するリストの演奏は大変な評判を得て、ヨーロッパ中のサロンやホールは、どこに行っても大盛況となりました。着飾った人々と香水の香りが充満する会場は、一曲ごとに拍手と感動、興奮、称賛の声で騒がしいほどでした。

### おしゃべり好きの聴衆

19世紀の聴衆は現在のように、かしまって席に座っていたわけではありません。演奏中に周囲の人と話して夢中になって、とりたてて非難されることはありませんでした。

百花繚乱の芸術の都パリ、技巧で聴衆を舞台に引きつけた音楽家の代表というと、リストと、ヴァイオリンのパガニーニです。一方作品の内容で勝利をおさめていた音楽家の筆頭がショ

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

パンでした。ショパンの場合、ポーランド民俗音楽を題材にして、情熱を秘める叙情性と歌曲のように流麗な旋律は、押さえ気味のフォルテからひそやかな弱音まで、繊細な音響の変化が心の奥底まで入り込むかのように、その音楽の美しさが聴衆をとりこにしていました。

### ショパンの怒り

録音手段が何もない時代、実際の演奏に注目してもらえる、それが音楽家の人気を知る最大のバロメーターでした。ですからリストのような奏者は、曲を探しては編曲に腕をふるい、原曲を華やかに飾りたて技巧の贅をこらして力を誇示していたのです。編曲対象になるということは、原曲が知られているということですから、ある意味、有名税のようなところがありました。でも自分の作品が「いじられること」に非常に苛立ちを感じた音楽家もいました。その一人がショパンです。

緻密で精巧なガラス細工のように隅々まで丹念に作り上げた作品に勝手に手をのばしてくる。つかみ取っては独自の解釈を加えて誇らしげに演奏してみせる、本当に腹立たしくて不愉快さを抑えきれなくなったショパンは、とうとう、友人であったはずのリストと絶縁してしまいました。

### 魅力的な編曲からクラシック入門

そうは言っても、編曲があるゆえに、原曲が多くの人に注目されるようになるという場合があります。

最近の例では平原綾香さんの〈ジュピター〉です。原曲は1874年に生まれ1934年に死んだイギリスを代表する作曲家グスターヴ・ホルストの管弦楽「惑星」で、地球以外の全ての惑星を題名にしています。平原綾香さんの〈ジュピター〉の原曲は第4曲「木星・快樂をもたらすもの」で、そのことを知って、他の6曲にも興味を持った方が少なからずいるでしょう。

さて先日（5月31日市川市文化会館大ホール）の小曾根真さんと塩谷哲さんのデュオコンサートは大成功でした。取り上げられた作品の一つがモーツァルトの二台ピアノのためのソナタで、第三楽章でやっとジャズの世界となりました。それまではいわば楽譜通りの演奏だったのです。私などは、お二人らしいジャズ版モーツァルトを早く聴きたいと急かしたい思いすらしていましたが、会場の方々は必ずしもそうではなかったようです。終演後回収したアンケートを見ますと、モーツァルトが良かったと書いた方が結構多かったのです。原曲を聴きなおしてみますという感想も聞こえてきました。

魅力的な編曲からクラシック入門、そういった演奏会企画もぜひ積極的に試みていきたいと思います。どうぞご期待ください。